鶴見大学紀要，第54号，第3部，87-93，2017.

教材としての『かさじぞう』

－幼児教育・小学校教育の視点から－

A Study on "Kasajizo" for Teaching
－ Early Childhood Education and Elementary Education －

山田　吉郎*
Yoshiro YAMADA

序

日本の代表的昔話の一つである『かさじぞう』は、幼児教育・小学校教育の教材として親しまれている。四季折々の年中行事を重視する幼児教育においては、晩秋から冬へかけて、寒さがつのり年の瀬が近づくにつれて、餅つきや大晦日、正月行事の解説と絡めて、『かさじぞう』の絵本の読み聞かせが行われることが多い。併せて素話やパネルシアター、ペープサートなど、多様な形式でこの物語が語られているであろう。一見、笠をかぶせてもらった地蔵が御礼の品を届けるという明快なテーマを設定した昔話ではあるが、そこには登場人物の心優しさをはじめ幼児が喜ぶ歌謡的要素や食べ物のモチーフ、数あそび、とりかえっこなど、幼年向け作品に必要な要素がいくつも導入されており、子どもたちの心を惹きつけている。しかも、『かさじぞう』は、年少、年中、年長それぞれのクラスの幼児に、それぞれ対応できる物語の奥行きを有している。

さらに、『かさじぞう』は、小学校教育の国語教材としても多くの教科書で取り入れられている。後述するが、現在では小学校二年生の教科書に掲載され、子どもたちに受容されている。物語の構成意図や登場人物の心理をどこまで汲みとるかによって、対象とする子どもの年齢に違いが生じていると思われる。

このように、昔話『かさじぞう』は、現在の幼児教育・小学校教育において欠くべからざる教材として認識されていると言えよう。本稿においては、『かさじぞう』の昔話としての構造と特質をおさえた上で、絵本や小学校国語教科書で取り扱われている『かさじぞう』について考察を加え、それぞれの受容のあり方を分析してゆくことにしたい。

1　昔話『かさじぞう』の構造

『かさじぞう』は文字通り代表的な日本の昔話であり、詳しい解説は省くが、いくつか要点のみおさえておきたい。

昔話『かさじぞう』は、『日本大百科全書』（小学館、項目執筆・小島瓔禮）によれば、「親切を施した人が、思いがけない謝礼を得ることを主題にした致富譚（たん）の一つ」であり、「笠を神仏に贈る親切の趣向が、年越しの夜の神巡遊の説話に結び付いたものであろう。」(注1) としている。また、「雨にぬれている観音に笠をかぶせてやった娘が幸せをつかむという話」などもあることが指摘されている。このように見てくると、『かさじぞう』という昔話理解のためには、年越しの夜という時間の特別なことを重視することが求められるであろう。

さらに、絵本化された『かさじぞう』に付された大石真の解説文にも目を向けたい。チャイルド本社から昭和57年に出版された『傑作愛蔵版　にほんのむかしばなし　かさじぞう』（文・大石真、絵・村上勉）という絵本があるが、この巻末に付された「〝かさじぞう〟について」(注2) の中で、執筆者の大石真はかなり詳しく『かさじぞう』の特質を語っている。

大石は大きく分けて、『かさじぞう』のプロットのヴァリエーションに関する論点と、この物語のもつ心優しさやユーモアなど主題・内容面に関する論点から解説を加えている。前者の『かさじぞう』のヴァリエーションについては、「元来が寒い北国の話なのでしょう。」としつつも、「その変形はほとんど日本全国に流布されていて、雪のかわりに雨というところもあり、笠のかわりに着物をお地蔵さまにかけてあげる、という話」もあると記す。さらに「〝こぶとりじいさん〟の話のように、隣の欲張りじいさんが自分もよいおじいさんの幸にあやかろうと、真似をして失敗するという話になっているところ」もあると述べる。悪いおじいさんの話が導入されると、『かさじぞう』全体の印象も大分ちがったものに感じられてくるであろうが、現在、幼児教育や小学校教育で取り扱われる『かさじぞう』は、よいおじいさん、おばあさんの紡ぎ出す心優しさを中心に据えた物語であろう。

次に、後者の主題・内容面への大石の論及については、

＊〒230-8501　横浜市鶴見区鶴見2-1-3　鶴見大学短期大学部保育科
Department of Early Childhood Care and Education, Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-Ku, Yokohama 230-8501, Japan.

子どもの読者の受容のあり方に重点を置いたものとなっている。大石は『かさじぞう』のプロットについて、「話の筋はすこぶる単純で、心のやさしい老夫婦が、笠をさし上げたお地蔵さまのおかげで楽しいお正月が迎えられるまでを、大みそかの約半日の時間の経過の中に描いて」いると述べ、さらに具体的な場面に即しながらそれが読者の子どもたちにどのように受け入れられてゆくのかを説明している。すなわち、自分の手ぬぐいを取って地蔵にほおかぶりをほどこすおじいさんや、その行為をいっしょに喜ぶおばあさんの、夫婦の優しさや純粋さを指摘し、さらに地蔵がかけ声をかけながらそりを引いてくるクライマックスの盛り上がり、そしてほおかぶりをした地蔵が混じっているユーモアなどが指摘されている。

さらに大石真は、『かさじぞう』に出てくる「お地蔵さま」に着目し、地蔵が元来は地獄に落ちた死者を救う菩薩の一つであり、それが後世「子どもに姿を変えて人間の苦しみを救ってくれる、というふうに伝説化」されたものだと述べている。そして、寒空に立っているお地蔵さまを目にしたおじいさんは、「お地蔵さまに子どもの姿を思い浮かべた子ども好きのおじいさんなのかもしれません。」と、この解説文を結んでいる。

以上見てきたように、大石真の『かさじぞう』の解説文は、専門的でありながら、子どもの読者の視点を重視したものと言える。その意味で、本稿においても随時参照しつつ論を進めることにしたい。

昔話『かさじぞう』は、今まで述べてきたように広く子どもたちを読者として親しまれてきた物語だが、本稿では以下、この物語のどのような要素が子どもの物語受容に適しているのか、その具体相を『かさじぞう』のプロットに即しつつ見てゆくことにする。

ここで随時『かさじぞう』の本文を引くことになるが、そのテキストとしては、現在、いくつかの国語教科書で採用されている岩崎京子の『かさこじぞう』を主として用いつつ、随時先述の大石真の『かさじぞう』の文章を参照することにしたい。岩崎京子の『かさこじぞう』は現在、『新しい国語二下』（東京書籍）『小学生のこくご二年』（三省堂）『みんなと学ぶ小学校こくご二年下』（学校図書）『ひろがることば小学国語2下』（教育出版）などで取り入れられているが（いずれも平成22年3月16日検定済）、本稿での『かさこじぞう』の引用は『みんなと学ぶ小学校こくご二年下』掲載のものに拠ることにする。

さて、『かさこじぞう』の物語構成は、かなり鮮明な起承転結の形を有している。すなわち、正月を前にして、じいさま、ばあさまの暮らしぶりが語られ、笠を編んで町へ売りにゆこうとするところまでが「起」、じいさまが町へ出かけて売ろうとするが、売れずに帰ろうとするところまでが「承」、帰り道で雪をかぶったお地蔵さまに笠をかぶせて帰宅し、ばあさまと話しながら眠りにつくまでが「転」、そして夜ふけにお地蔵さまが正月のために品々を届けに来て、じいさま、ばあさまが無事に正月を迎えられるまでが「結」であろうか。また、じいさまが町に出て売り歩くが売れずに帰ろうとするところまでが前半部、帰り道に地蔵さまと出会う場面以降を後半部とする捉え方も可能であろう。他の整理の仕方もあろうかと思われるが、ともあれ『かさこじぞう』がたいへんに分かりやすく、また起伏に富んだ物語構成になっていることは明らかであろう。じいさま、ばあさまの心優しさというきわめて普遍的な主題を提示しながらも、変化に富み想像力を駆り立てる物語構成が、子どもたちに広く受け入れられ、教材としても支持されている理由であろう。本稿では以下、前半部と後半部の二部に分けて、この昔話の特質を考察し、その特質が幼児教育や小学校教育においてどのように取り入れられているのかを分析してゆきたい。

なお、岩崎京子『かさこじぞう』の「かさこ」は「かさ」に「こ」という接尾語が付加されたものであろう。本稿では、この昔話の一般的な呼称としては「かさじぞう」を用い、岩崎の再話によるもののみ「かさこじぞう」と呼ぶことにする。

2　昔話『かさじぞう』と子どもの読者
ー前半部をめぐってー

まず、冒頭部であるが、岩崎の『かさこじぞう』では、「むかしむかし、あるところに、じいさまとばあさまがありましたと。／大そうびんぼうで、その日その日を、やっとくらしておりました。」というように、昔話の定型的な語り出しとなっているが、ここで注目したいのは、次のようなじいさまの言葉であろう。

「ああ、そのへんまで、お正月さんがござらっしゃるというに、もちこの用意（ようい）もできんのう。」

このじいさまの言葉は、『かさこじぞう』を読む（あるいは読み聞かせを聞く）子どもの心に意外な印象を呼び起こすであろう。現代の感覚では、正月は、クリスマスや節分、ひなまつり、七夕などと同じように、一年の暦の中に置かれているものであり、その時期が来ればその行事を楽しむという感覚があるであろう。それに対して、この『かさこじぞう』では、「お正月さん」がその辺までおいでになっているというように、正月を動作の主体として半ば擬人化し、さらに「ござらっしゃる」というように敬意を込めている。これは基本的には、先述のように年越しの夜の神巡遊の説話というものと関連づけられるであろうが、ともあれ正月というものが時間が経てばおのずとその日になるという捉え方ではなく、「お正月さん」が神様やお客様のようにせっかくいらっしゃる予定なのに、その「お正月さん」をもてなす餅を用意できなくて困っている、もっと言えば、申し訳ないというニュアンスがそこにはある。

こうした正月の捉え方は、人間主体ではなく、「お正月さん」を人間が心を尽くしてもてなすという考え方であり、現代の子どもの心にあらためて気づきをうながすのではなかろうか。

が、昔話の『かさじぞう』がすべてこのような語りになっているわけではない。ちなみに、先述の大石真の文章による『かさじぞう』では、

あしたは　おしょうがつだというのに、ふたりのうちには　おもち　ひとつ　ありません。

と記されているだけであり、正月自体を擬人化し敬意を込めるような形ではない。岩崎京子の『かさこじぞう』には岩崎の再話者としてのモチーフが深く付与されていることが分かる。（ただ、大石の『かさじぞう』にそうした正月の神を迎えるという考え方がないというのではなく、とくに強調しなかったと捉えておくべきであろう。）

『かさこじぞう』のプロットに沿って見てゆく中で次に注目したいのは、町での大年（おおどし）の市（いち）の場面である。大みそかの人々のにぎわいと活気が感じられて、この場面に接する子どもたちの心もおのずとはずむであろう。岩崎の『かさこじぞう』では次のように語られる。

町には、大年（おおどし）の市がたっていて、正月買（が）いもんの人で大にぎわいでした。

うすやきねを売る店（みせ）もあれば、山からまつを切ってきて、売っている人もいました。

「ええ、まつはいらんか。おかざりのまつはいらんか。」

じいさまも、声をはりあげました。

「ええ、かさやかさやあ。かさこはいらんか。」

けれども、だれもふりむいてくれません。しかたなく、じいさまは、帰ることにしました。

この場面は、盛り上がりを工夫するかどうかで、再話者の判断が分かれるところではなかろうか。掲出の『かさこじぞう』では、プロット後半の盛り上がりを図るための措置であろうか、比較的淡々と叙述がなされているように感じられる。ただ、この学校図書版の教科書においては、掲出の場面に、まなべけいすけによる印象的な市の風景を描いた挿絵が掲載されており、文と絵が相まって心はずむにぎわいの様子が伝わってくる。

これに対して、大石真の『かさじぞう』ではこの大みそかの市の場面に多く筆が費やされている。この大石の『かさじぞう』では、じいさまが町へ売りにゆくものが、「かさ」ではなく「たきぎ」となっており、したがって大みそかの市で笠を売っていたじいさまと売り物を交換する場面が設けられている。いわゆる「とりかえっこ」であり、これが子どもたちの遊びの重要な要素であることは言を俟たないであろう。すなわち市のにぎわいの中でこの物語を受容する子どもの心の躍動感がうながされることになる。

この大石の『かさじぞう』では、笠売りのじいさまと取り替える場面を、次のように描く。

「もしもし」と、だれかが　じいさまに　こえを　かけました。

それは　かさうりの　じいさまでした。

「みれば、おまえさまの　たきぎは　ちっとも　うれんようじゃ。わしの　かさも　ちっとも　うれん。どうだね、うれないものどうし、とりかえっこを　しないかね。」

「それは　おもしろい。」

じいさまは　たきぎを　いつつの　かさと　とりかえました。

ここで目を向けたいのは、笠売りのじいさまの提案に対して、じいさまが「それは　おもしろい。」と声をあげているところである。「おもしろい」と自ら心をはずませるところには、おのずと子どもの心のはずみが重ね合わされるであろう。そして、さらに注目したいのは、大石がこのとりかえっこをはさむ前後の場面に歌謡的要素を取り入れているところである。前後の歌謡的フレーズを比較してみよう。

たきぎは　おもいぞ　よっこらしょ
まちは　とおいぞ　よっこらしょ
みちは　すべるぞ　よっこらしょ
かぜは　さむいぞ　よっこらしょ
（町へやってくる場面）
かさは　かるいが　どっこいしょ
うちは　とおいぞ　どっこいしょ
ゆきは　ふかいな　どっこいしょ
もうすぐ　ひぐれだ　どっこいしょ
（町から帰る場面）

それぞれが基本的に七五調四行の詩句から成り立っている。日本語の韻文の最も基本的な韻律が導入されているが、幼い子ども向けの童話・絵本の類においてはこうした構造をなす詩句がしばしば見られると言ってよいであろう。（宮沢賢治『雪渡り』や中川李枝子『ぐりとぐら』などにもそうしたフレーズが見られる。）掲出の町への行き帰りにうたわれる歌謡的フレーズは、「たきぎは　おもいぞ　よっこらしょ」「かさは　かるいが　どっこいしょ」と、行き帰りのじいさまの様子や心情を鮮明に対照させながら、雪深い道をたどるじいさまの苦労の様子を表現している。そして、歌謡的フレーズをリズムをとりながらくちずさむ中で、子どもたちの心が自然とじいさまの心に寄り添うように工夫されている。このフレーズは再話者としての大石の個性があらわれているところである。先に見た岩崎京子『かさこじぞう』の本文と比較すると、大石真の『かさじぞう』はじいさまが町で立ち回る場面により重点を置いて語られている点に特色がある。昔話の『かさじぞう』においては、その構成上、動きがあり読者の子どもの心をはずませる場面として、この町の市の場面と、地蔵がそりを引いてくる場面の二つがあるが、この両方に重点を置くか、あるいは後半の地蔵が出現する場面に重点を置くかによって、分かれてくるであろう。（町の市の場面のみに重点を置くというのは、そりを引く場面がクライマックスであるという点から考えられないであろう。）大石真『かさじぞう』は前者に、先述の岩崎京子『かさこじぞう』は後者にあてはまると思われる。

ところで、この町の市の場面は、幼児教育において子どもの心に印象を残す重要な場面である。幼児教育において『かさじぞう』が取り扱われる際、地蔵がかけ声をかけながらそりを引いてくる場面とともに重視されるのが大みそかの市の場面である。やはり人のにぎわいが子どもの心を浮き立たせるのであるが、この場面の具体的な生かし方としてはいろいろ考えられるであろう。その一つとして例示し

たいのが、萌文書林刊『新訂お話とその魅力ー作品と話し方のポイントー』（相馬和子・岡本富郎・中田カヨ子編、相馬和子・都丸つや子・星道子著、平成元年10月初版発行、平成14年4月新訂版発行）における活用例である。『かさじぞう』の項目を執筆した星道子は、「このお話の魅力『かさじぞう』について」の中で次のように述べている。

なお、この「かさじぞう」は、ペープサートや人形劇、それに児童劇とさまざまな形で演じられています。

特に、ペープサートの場合、おじいさんが町でまきを売り歩く場面は子どもに人気があります。登場人物を描き、くるっと回しながら舞台を行き来する姿に、子どもたちは歓声を上げます。

このような身近に感じられるところに魅力があるのだと思います。(注3)

大みそかの町で薪を売るじいさまの歩きまわる姿を、ペープサートのもつ回転する性質をみごとに生かし、捉えた例である。遠い昔話の人物像を、現代の日常的感覚の中で再現することによって、子どもたちの心に臨場感をもって受け止められるであろう。

ただ、『かさじぞう』において、最初に薪を売り歩き、そののち笠と取り換える場面を取り入れることは、プロットとしてやや長くなる傾きがあることは事実である。そのため、幼児教育の教材として取り扱う際には、とくに年少児を対象にした場合に、この薪売りの場面ととりかえっこの場面を省略してしまうことも行われているようである。前掲書の「このお話をするときのポイント」で、星道子は次のように記す。

このお話は貧しい老夫婦の心あたたまるやさしさあふれるお話です。

おじいさん、おばあさんの会話から、お互いを思いやるやさしさを汲み取りましょう。

年齢が低く長いお話を聞くのが無理と思われるときは、最初からおじいさんが笠を売りに出かけたことにしてもかまわないでしょう。また、町の様子は説明だけにするとか、話を短く脚色して話してもよいでしょう。(注4)

昔話『かさじぞう』の主題がじいさま、ばあさまの「お互いを思いやるやさしさ」にあることは確かで、その主題に収斂させるために前半部を簡略化することは一つの選択である。実際、先述のように多くの小学校国語教科書に採られている岩崎京子『かさこじぞう』は最初から笠を売りに行く形となっており、大みそかの町でじいさまが笠と薪のとりかえっこを「おもしろい」と興ずる姿は描かれていない。たしかに小学校教育において、じいさま、ばあさまの心優しさに主眼を置く重要性は言うまでもないが、併せて町のにぎわいやとりかえっこに心はずませるプロットの型にも一定の意義を認めるべきであろう。

3　昔話『かさじぞう』と子どもの読者
ー後半部をめぐってー

次に、物語後半の、じいさまの帰り道の場面を見てゆく。この場面は、岩崎京子『かさこじぞう』では、重点を置いて語られているように思われる。具体的には、町から帰るじいさまのわびしい気持ちや、途中で出会った地蔵さまの吹雪の中の姿などが印象深く語られている。そうした場面を引いてみる。

「年こしの日に、かさこなんか買うもんはおらんのじゃろ。ああ、もちこももたんで帰れば、ばあさまはがっかりするじゃろうのう。」

いつの間にか、日もくれかけました。

じいさまは、とんぼりとんぼり町を出て、村の外(はず)れの野っ原まで来ました。

風(かぜ)が出てきて、ひどいふぶきになりました。

ふと顔を上げると、道ばたに、じぞうさまが六人立っていました。

おどうはなし、木のかげもなし、ふきっさらしの野っ原なもんで、じぞうさまは、かたがわだけ雪(ゆき)にうもれているのでした。

「おう、お気のどくにな。さぞつめたかろうのう。」

じいさまは、じぞうさまのおつむの雪をかきおとしました。

「こっちのじぞうさまは、ほおべたにしみをこさえて。それから、このじぞうさまはどうじゃ。はなからつらを下げてござらっしゃる。」

じいさまは、ぬれてつめたいじぞうさまの、かたやせなやらをなでました。

まず注目したいのは、「じいさまは、とんぼりとんぼり町を出て、村の外(はず)れの野っ原まで来ました。」という描写における「とんぼりとんぼり町を出て」という表現である。通常は「とぼとぼ町を出て」と表現するところであろうが、ここで児童文学者岩崎京子の個性が発揮され、「とんぼりとんぼり」と、いかにも子どもが口ずさみそうなリズムある擬態語を生み出している。おそらくは岩崎の独創であろうが、子ども向けの物語におけるオノマトペの重要性と効果を充分にふまえた上での表現であったと考えられる。

次に注目したいのは、吹雪のなか吹きさらしになっている地蔵さまの描写である。「おどうはなし、木のかげもなし、ふきっさらしの野っ原」で、地蔵さまは「かたがわだけ雪(ゆき)にうもれている」のである。こうしたこまやかな写実的表現は他の『かさじぞう』の再話者による表現と比べても際立っている。たとえば先述の大石真『かさじぞう』では、この場面は、

じいさまが　どっこいしょ　どっこいしょと　あるいていくと、おじぞうさまが　むっつ、あたまに　ゆきを　つもらせて　たっていました。

とても　さむそうです。

と簡潔に記されているだけである。すなわち、この地蔵さまの吹きさらしの姿の描写に岩崎京子『かさこじぞう』はとくに重点を置いているということである。その意味で、前半の町の市の場面の簡潔さとは対照的である。さらに岩崎は地蔵さまへ声をかけるじいさまの言葉も丹念に描いている。「こっちのじぞうさまは、ほおべたにしみをこさえて。

それから、このじぞうさまはどうじゃ。はなからつららを下げてござらっしゃる。」ときわめて写実的な描写が見られる。

このように岩崎の『かさこじぞう』において、じいさまの帰途の場面は物語の雰囲気を盛り上げてゆこうとする語り手の意識がつよくにじみ出ており、この意識はこれ以降深められてゆくのである。

なお、この後、地蔵さまに笠をかぶせるシーンにおいても、『かさこじぞう』では、「じいさまは、売りもののかさをじぞうさまにかぶせると、風でとばぬよう、しっかり、あごのところでむすんであげました。」と、やはりじいさまの手の動きを写実的に描いている。そしてさらに、笠が一つ足りず六つめの地蔵さまに自分の手拭いをかぶせてやる場面では、

じいさまは、自分のつぎはぎの手ぬぐいをとると、いちばんしまいのじぞうさまにかぶせました。

「これでええ、これでええ。」

そこで、やっと安心(あんしん)して、うちに帰りました。

というように、じいさまの心理がこまやかに描写されているのである。本来、近代小説においては、プロットを進める叙述とその場の状況をありありと描き出す叙述とが相まって書き進められることが多いが、そうした描写的要素が岩崎の『かさこじぞう』では取り入れられている。昔話の語りの簡潔さに描写の重視という文学的要素が取り入れられているということであろう。そして、実はこの点が、とくに小学校国語教科書の読後課題において、登場人物の心情理解という観点から重視されてゆくこととなるのである。

さて、じいさまが帰宅してからの、ばあさまとの語らいの場面が、今述べた登場人物の心情理解の観点からもとくに重視される。この語らいの場面は、昔話『かさじぞう』の主題に繋がる場面であり、再話者によって丹念に描かれることが多い。岩崎の『かさこじぞう』も大石の『かさじぞう』もその点では共通しているが、両者を比較して一つ違いを示せば、それは岩崎の『かさこじぞう』には歌謡的要素が取り入れられているという点であろう。帰宅したじいさまが一日のことや、笠を地蔵さまにかぶせたことをばあさまに語り、ばあさまがそれはよいことをしたと応えたところまでは両者はほぼ同じ内容だが、そのあと岩崎の『かさこじぞう』では次のように歌謡的場面が設けられる。

「やれやれ、とうとうもちこなしの年こしだ。そんならひとつ、もちつきのまねごとでもしようかのう。」

じいさまは、

米(こめ)のもちこ

ひとうすばったら

と、いろりのふちをたたきました。すると、ばあさまも、ほほとわらって、

あわのもちこ

ひとうすばったら

と、あいどりのまねをしました。

それから、二人(ふたり)は、つけなかみかみ、おゆをのんで休みました。

じいさまとばあさまがうたい合うこの場面は、『かさこじぞう』の個性的要素がきわだつところである。通常、童話（とくに幼年童話）においても、歌謡的要素はしばしば取り入れられるのであるが、その多くは物語の高潮部において主題を印象づける際に用いられる（宮沢賢治『雪渡り』、松谷みよ子「モモちゃんシリーズ」、角野栄子「アッチ　コッチ　ソッチのちいさなおばけシリーズ」など）。『かさこじぞう』では、じいさまの心を理解するばあさまの心を、歌謡を通して親しみやすく伝える効果を上げているであろう。

以上見てきたように、じいさまが帰り道に地蔵さまと出会う場面から帰宅後のばあさまとの語らいの場面へかけては、昔話『かさじぞう』の主題に直結する場面であり、こまやかに語られることが多いが、とりわけ岩崎の『かさこじぞう』においては歌謡的要素も効果的に導入され、情感豊かに描かれていると言えよう。

ところで、この場面は小学校国語教科書においても、その読後課題の中で重視されていると考えられる。岩崎の『かさこじぞう』が採用されている学校図書版を例示すると、「がくしゅうのてびき」として四項目設定されている中で、その第二、第三の課題でその点が重視されている。その部分を引く。

2　場面や人物(じんぶつ)のようすをそうぞうする

つぎの場面での、じいさまやばあさまのようすや気もちをそうぞうしましょう。

①せっせとすげがさをあんでいた時。

②しかたなく帰ることにした時。

③やっと安心(あんしん)して、うちに帰ることにした時。

④つけなかみかみ、おゆをのんでねた時。

⑤空ぞりを引いて帰っていくじぞうさまを見た時。

3　かんそうを聞き合う

みなさんは、このようなじいさまやばあさまをどう思いますか。(注5)

第二の課題の③④はじいさま、ばあさまの心優しさに着目して設定されていると思われ、つづく第三の課題でも、「このようなじいさまやばあさま」とは、主として同様の心優しさを指していると捉えてよいであろう。幼児教育において年少の子どもを対象とする場合では、むしろ先に述べたようにとりかえっこなど遊びの要素にも着目されることが多いのであるが、小学校教育においては登場人物の心情理解にとくに重点が置かれているのである。

もう一例、この場面に関連して指導案化されたものを見ておきたい。やや刊行年は古いが北海道教育大学国語教育研究会編『小学校国語科教育法』（平成4年4月、学術図書出版社）の第六章「指導計画の作成と評価」（鈴木信義執筆）で提示された『かさこじぞう』の学習指導案である。じいさまが町からの帰り道、吹雪のなかの地蔵さまに出会い、笠をかぶせる場面の指導案である。(注6) 目標を「地蔵様をいたわるじいさまの優しい人柄を読み取ることができる。」と設定し、授業の展開部の学習活動として、「地蔵様の様子や、じいさまの気持ちを読み取る。」としている。そし

て、具体的に「地蔵様の様子を考える。」「じいさまは、地蔵様にどのようにしてあげたか考える。」「じいさまの気持ちについて話し合う。」「『これでええ』と言ったのはどんな気持ちかを考える。」などの活動をあげている。これも基本的にじいさまの心優しさに着目して授業展開を構想しており、昔話『かさこじぞう』のもつ情意的要素に着眼している。さらに、指導目標に対する評価として、「場面の様子を文中のことばを手がかりに十分に想像することができたか。」「じいさまの地蔵様をいたわる様子を具体的に指摘することができたか。」「じいさまのことばを補い、その優しさを表現できたか。」「理解したことを感情をこめて音読できたか。」(注7) などの点が評価されるべきだとしている。幼児教育では周知のように遊びを通して昔話の魅力を受容することが求められるわけだが、小学校教育においては、もちろん昔話を味わう喜びと楽しみを重視はするものの、さらに授業における児童とのかかわりの中で、昔話の構造の理解や登場人物の心情への共感、理解が評価の軸となっている。

最後に昔話『かさじぞう』の終結部の地蔵さまがそりを引いてくる場面についてである。この場面は非日常的なできごとが起こる緊迫感と期待感の高まるところで、とくに幼児教育においては、そりを引くかけ声をくり返すなど工夫がなされるところである。岩崎京子の『かさこじぞう』では、独特のかけ声や歌謡的表現を用いるなどとりわけ力点を置いているように見受けられる。地蔵さまがそりを引いてくる場面を引用する。

> すると、ま夜中ごろ、雪の中を、
>
> じょいやさ　じょいやさ
>
> と、そりを引くかけ声がしてきました。(中略)
>
> 耳をすまして聞いてみると、
>
> 六人のじぞうさ
>
> かさことってかぶせた
>
> じさまのうちはどこだ
>
> ばさまのうちはどこだ
>
> と歌っているのでした。そして、じいさまのうちの前で止まると、何やらおもいものを、
>
> ずっさん　ずっさん
>
> と下ろしていきました。
>
> じいさまとばあさまが、おきていって、雨戸をくると、かさこをかぶったじぞうさまと、手ぬぐいをかぶったじぞうさまが、
>
> じょいやさ　じょいやさ
>
> と、空ぞりを引いて帰っていくところでした。

一見して明らかなように、ここでは、「じょいやさ　じょいやさ」という個性的なかけ声や、「ずっさん　ずっさん」という同じく個性あふれるオノマトペが見られ、さらに地蔵さまの「じさまのうちはどこだ　ばさまのうちはどこだ」という歌謡的要素が取り入れられている。クライマックスの場面だけにそれを盛り上げようとする再話者岩崎の洗練された技巧が見られると言ってよい。とくに地蔵さまがそりを引くかけ声は重視されており、再話者によっていろいろと工夫されているところである。ちなみに先述の大石真『かさじぞう』では「じょいさ　じょいさ」となっており、また同じく既述の『新訂お話とその魅力ー作品と話し方のポイントー』所収の『かさじぞう』では「ずしん、ずしん、よいさ、よいさ」となっている。そして後者では、幼児に読み聞かせるにあたっての留意点として、「すべてが寝静まった夜ふけ、ずしん、ずしん、よいさ、よいさのかけ声は物語のクライマックスです。リズムをつけて何度でも繰り返して話してください。子どもたちの大好きなところです。」「なお、ずしん、ずしん、よいさ、よいさ、は重く低い声で間を取りながらがよいでしょう。」(注8) とこまやかな配慮を記している。

以上のように、昔話『かさじぞう』の終結部は、再話者がさまざまな工夫をほどこし、読者である子どもに心はずむような期待感をうながすところである。その直前のじいさまとばあさまの夜の語らいが静かな情調を湛えているとすれば、一転して律動感と期待感に充ちた場面転換がなされており、そこに一見単純な物語に見えながらこの昔話のすぐれた構造性を看取することができるであろう。

再び岩崎の『かさこじぞう』に目を戻せば、じいさまとばあさまの心優しい語らいの場面と、その直後の律動的な地蔵さまの登場の場面がみごとな静と動の対照をなしており、小学校低学年の児童の心を惹きつける構成をなしている点に注目したい。実際、学校図書版の『かさこじぞう』の「学しゅうのてびき」においては、「くふうしながらはっぴょうする」という項目を設定し、役割を決めての音読や、劇、紙芝居にして発表するなど、併せて物語を楽しむ面への配慮もなされているのである。

4　教材としての『かさじぞう』の特性
ーまとめに代えてー

今まで見てきたように、昔話『かさじぞう』は幼児教育、小学校教育においてともに活用され、すぐれた教材としての特質を有していると考えられる。物語はじいさまに笠をかぶせてもらった地蔵さまが御礼の品を届けるという明快なプロットに沿って進められているのであるが、この物語を受容する子どもたちの年齢に即して多様な受容がなされる点に大きな特徴があろう。すなわち、大みそかの市の場面や地蔵さまがそりを引いてくる場面では、その動きのある展開の中で、オノマトペや歌謡的要素、とりかえっこなど遊びの要素がふんだんに盛り込まれ、とくに幼児教育においては魅力的な教材となっているであろう。また、じいさま、ばあさまの心優しさや、吹雪の中の地蔵さまの姿へ心を寄り添わせることも、年中、年長児では可能になってくるであろう。一方で、小学校の国語教科書では、とくにじいさまの地蔵さまへの気持ちや、そんなじいさまの心を理解するばあさまの心情など、心情理解の面に重点を置いていると思われるが、併せて地蔵さま出現の場面などを想像力と期待をもって受容する児童の心の躍動感をも、学習のねらいとして設定している。

このように見てくると、昔話『かさじぞう』は、何歳児

向けというような単純な括り方で論ずることはできず、この物語を読む子どもたちの心に幾層もの受容の網を広げている点に大きな特徴があると言えるのである。このような受容の奥行きを有している点に、子ども向けの昔話として、昔話の中でも独自の位置を占めているゆえんがあろう。

今後、『かさじぞう』をめぐって他の再話作品との比較や、幼児教育における読み聞かせから活動の展開への考察、さらに昔話を教材化することの意義など、さまざまな検討課題が想定されるが、機会をあらためて論ずることにしたい。

注

(1)『日本大百科全書』第5巻（昭和60年8月、小学館）138頁参照。
(2)『傑作愛蔵版　にほんのむかしばなし　かさじぞう』（文・大石真、絵・村上勉、昭和57年、チャイルド本社）33頁参照。
(3) 相馬和子・岡本富郎・中田カヨ子編、相馬和子・都丸つや子・星道子著『新訂お話とその魅力－作品と話し方のポイント－』（平成元年10月初版、平成14年4月新訂版、萌文書林）174頁参照。
(4) (3) に同じ。175頁参照。
(5)『みんなと学ぶ小学校こくご二年下』（平成22年3月16日検定済、平成24年7月1日発行、学校図書）40-41頁参照。
(6) 北海道教育大学国語教育研究会編『小学校国語科教育法』（平成4年4月、学術図書出版社）72頁参照。
(7) (6) に同じ。73頁参照。
(8) (3) に同じ。173頁参照。